『エクセルシオール』のコレオグラフィーにおける静止と運動の美学

古後奈緒子（大阪大学人文学研究科）

彫像や人形といった無機物が生命を得て動き出す物語は、古来より様々な芸術ジャンルに変奏を見出すことができ、19 世紀末から 20 世紀初頭にいたるモダニズムの舞踊にも現れる。この素材は、1880 年代より劇場に導入された電気技術にエネルギーを得て、いかに展開されたのか。本発表では、トリノに実在するフレジュス・トンネル記念碑の舞台化として、ダンサーやエキストラが演じる活人画のごとき大団円に枠づけられたバレエ『エクセルシオール』(1881 年ミラノ初演)について考察する。

本研究に先立ち発表者は、ウィーンを舞台としてこの劇場の電化をたどる中で、バレエが電気のメディアとなり、翻っては電気技術と結びつくことでバレエの制作体制や鑑賞文化、ひいては社会的位階にいかに作用したかを確認した。この過程での作品の特徴の変化は、二つの軸で捉えられる。一つは、劇場に具現される新技術を誇るかたちで、ドラマトゥルギーに技術論的な新旧優劣比較を行うパターン。もう一つは、劇場の照明や動力機構を統合する電気技術システムの発展と連動した振付の開発により、新たな視覚効果を継続して探求する流れである。

『エクセルシオール』は、モデルネの様々な娯楽、芸術の表現を先取りしていると評され、ドラマトゥルギーとコレオグラフィーに関する先行研究の蓄積が厚い。同時代に電気技術と密接な関わりを持ったスペクタクル・バレエが、造形芸術を範とするバレエの延長に、身体の運動を中心に置くモダンダンスの美学へいかなる関係で結びついてゆくのか。作品の特徴を二つの側面で整理し、考察の足がかりを得たい。

1）勝利と進化へ鼓舞するドラマトゥルギー

リブレットの分析と各国アダプテーションから、本作がそれまでの 19 世紀バレエとは異なる、新しい題材と構成を持つという指摘が裏付けられる。一端を挙げれば、「歴史的」再現場面では、未開から文明へと地域や人種を展示してゆき、その傍らソリストが演じる啓蒙主義と蒙昧主義の「寓意」が優劣を争って「歴史」に介入する。これは、新旧優劣比較を繰り返す同時代の産業バレエが、進化の展示の場でもある状況を、本作が準備したと考えられる。

2）視覚を活性化するコレオグラフィーの戦略

振付については、近年の研究で、情動的なジェスチャーに古典的なパトスの書き換えと、カルロ・ブラジスやフランソワ・デルサルトの理論を参照した演技術との連関が論じられる。一方で、再現上演時より「カレイドスコープ」様の視覚効果を指摘されてきた群舞のフィギュールに関しては、連続写真やアニメーションなど初期映画につながる光学技術との親近性が指摘されている。これらの視覚効果は、見る者の運動感覚を巻き込み、対象への距離を消滅させる臨場感、没入感に結びつき、光学見世物との親近性を示唆するものである。

以上のように、スペクタクル・バレエは確かに、二項対立に単純化し、情動と感性的快楽に訴えて進歩主義と科学信仰を喧伝した大衆メディアと捉えられよう。振付においては、電気技術との相互作用に、レビューやミュージカル映画を先取りする新たな視覚効果が探求された。舞踊史のナラティブの修正という観点から、これはモダンダンスの舞踊理論の要をなす流れ（リズム）に対する知覚、感性的認識の開拓につながるものとして注目される。以上は、持続と切断の美学に特徴付けられるモダンダンスとの関係を再考する足掛かりとなると考えられる。